

博物館はボランティアに支えられて

伊波悦子
(沖縄県立博物館)

Volunteer Support Museum Program

Etsuko IHA

Okinawa Prefectural Museum

はじめに

今年4月に沖縄県立博物館に赴任した。不覚にも博物館にボランティアが置かれているのを知らなかった。「ボランティア」といえば福祉ボランティアがすぐ頭に浮かぶ。阪神大震災や福井の油流出事故あたりから市民権を得た。沖縄からは遠距離であるが、テレビで目の当たりに知らされる。しかしその日は京都の大学に通う娘が成人式のため帰省をしており、京都に戻るため伊丹空港へ発つ日であった。突然のニュースに仰天し報道にくぎづけであった。また福井のオイル取りボランティアに職場の女子職員が参加した事もあり人ごとではなかった。

博物館に勤務して1週間目にはボランティアの皆さんに展示室解説会を実施していた。すでに活動しているメンバーなのでスムーズに運んだ。この博物館のボランティアは教育ボランティアである。修学旅行や団体見学の方に展示解説補助をしたり、裏方で資料整理をしたり、子供体験教室のアシスタントをするのである。

1. 展示室解説会

この講座は館内の四つの展示室(考古歴史・自然・美工・民俗)を、担当の学芸員が解説のポイントなどを指導してくれる。そして自分の得意とする分野を見つけるためである。

	受講者	各展示室	講師名
4月10日	20人	歴史室	萩尾俊章
4月17日	21人	自然史室	高原建二
4月24日	17人	民俗室	太田健一
5月1日	14人	美工室	輿那嶺一子

計 72人

各展示室には簡単なリーフレットが置かれており、また個々についてはキャプションに細かく説明されているので、あまり言う必要はない。質問があればそれに答えると良い。また展示室全体の流れをつかみ、その中で自分の好きな物や分野は十分に調べると良いとアドバイスされた。自然史室に植物や蝶が少ないのが残念だとの声があった。美術工芸も分野が広く（書画・染織・陶器・漆器・ガラス）受講生はとまどった。おまけに収蔵庫には7万5千点もあると言う。ただ圧倒されるばかりである。

2. ボランティア養成講座

平成10年度教育ボランティア養成講座実施計画

1. 目的

博物館における案内や解説員等のボランティア養成をめざし、ボランティアとして必要な知識や技能を習得するため教育ボランティア養成講座を開講する。

2. 方針

- ① 講師は当館の職員が分担をして当たる。
- ② 博物館の展示内容と普及活動に即した講座内容とする。
- ③ 博物館の事業に関わる内容も考慮する。

3. 期日と時間

- ・期 間 7月8日（水）～ 8月26日（水） 各回とも水曜日に実施する。
- ・時 間 午後 2：00 ～ 4：00

4. 講演内容と期日

回数	日時	分野	講師名	演題（講座内容）
第1回	7月8日	教育普及	前田真之	「博物館におけるボランティアの役割」
第2回	7月15日	染織	伊波悦子	「沖縄の染織」
第3回	7月22日	自然	神谷厚昭	「沖縄の岩石と化石」
第4回	7月29日	美術工芸	津波古 聡	「焼物のつくりかたのはなし」
第5回	8月5日	考古	大城 慧	「埋蔵文化って何だろう」
第6回	8月12日	民俗	當間 一郎	「組踊の写本を読む」
第7回	8月19日	歴史	萩尾俊章	「琉球王国の歴史」
第8回	8月26日	教育普及	仲底善章	「博物館ってどんなところ？」

3. ボランティア専門講座

平成10年9月8日

10/2	芋を素材にした 琉球料理	松本料理学院 院長	松本 嘉代子	要実費 60名
10/9	和紙作りについて	蕉紙庵 手漉琉球紙工房	安慶 名 清	20名
10/23	視覚障害者と教育の方法 ～認識の広がり求めて	県立盲学校 校長	仲宗根 恵 蔵	なし
10/30	壺屋焼の歴史について	壺屋博物館館長	渡名 喜 明	要入館料
11/6	琉球料理の特徴と 暮らしの知恵	松本料理学院	松本 嘉代子	要実費 60名
11/13	七玉そろばんの原理と その使用方法	全珠連顧問	仲西 義 勝	なし
11/20	沖縄の季節と植物	元県立高校教頭	佐久本 徹	なし
11/27	転換期の教育 ～学社連携から学社融合～	元教育長	津留 建 二	なし
12/4	沖縄のグスクを見る	考古学会会長	嵩元 政 秀	なし
12/11	伊是名島の文化	元沖縄タイムス	漢那 安 輝	なし

各分野にわたる講座を例年になく多めに10回も組んだ。延べ人数200人で平均20人の受講者である。

今回の特徴は10回中6回は博物館から外に出ての講座である。それはめったに行かない所、めったに見られない所をたずねた。

10月2日の「料理講習のいも料理」は、子ども体験教室のイモ作りと関連させたプログラムである。いもの裏ごしに男性群の大活躍があった。普段掛け慣れないエプロンもお似合いである。

9日の和紙作りは、王朝時代に芭蕉氏が漉かれていた儀保樋川近くにある蕉紙庵をたずねた。折良く三桎紙を漉いている所であった。翌日天気の良いれば天日干しをするという。

23日の「盲学校訪問」では、低学年の教材作りに、ボランティア活動が大きな役割を果たしていることを知る。そしてコンピューターを上手に扱い、全国とのインターネットの

交換など設備も整っている。廊下を歩く時、校長先生は誰にでも声を掛けてあいさつを交わし、来校者であることを伝えた。とても暖かみを感じた。

30日の「壺屋焼物博物館」見学は、今年2月に開館したばかりで皆初めての訪問である。館長の「壺屋の歴史」の講演を聞き、その後館内・館外・屋上まで案内してくれた。壺屋の民家を再現したり、窯跡をほぼおなじ位置に作ったり、ビデオの上映や展示にも工夫がなされ満足した。また屋上から壺屋の町並みが見渡され、夕日に染まる那覇の空が美しかった。「壺屋の町全体が博物館ですよ。」との館長の言葉が印象的である。皆この場から去りがたく近くのコーヒー店でヤチムン談義に花が咲いた。

11月6日「琉球料理」は沖縄の正月料理である。「ナントゥーンズ」「ミヌダル」「ジーマーミ豆腐」「トゥルワカシー」と普段作ることのない、いや素人では作りにくい料理であった。手間のかかるものばかりだが、これで今度の正月は万事オーケーである。

13日の「七玉そろばん」は、民俗室に七玉そろばんが展示されているのに興味を持ちみんな学習することになった。この講座の前に中国旅行をしたおり、大きなスーパーでもまだ七玉そろばんを使っているのに驚いた。そして写真に納めておいた。講演の中でわり算九九の話が出てめんくらった。

20日の「季節と植物」は「植物季節」についての説明やフェノロジー（生物気候学）の説明など興味深いものであった。それから館外に出て中庭や龍潭の植物を観察した。毎日見ているクワデーサーひとつをとっても、長枝・短枝があり実は海水に浮くと言う耳新しい事ばかりである。足元を見ると実がいっぱい落ちていてその中の一つを拾い上げて「蝙蝠が食べた跡です。」と説明した。椰子・琉球松についても丁寧に解説された。潭の周りにはアコウ・デイゴ・アカギ・シマグワ・シャチノキ・タブノキ・イヌビワ・ワルナス・ツワブキなど樹木があふれておりうす暗くなるまで歩いた。

27日の「転換期の教育について」は、21世紀を展望した教育への模索を最新情報を示しながらの説明であった。学校教育もここまで変わっているのか、我々もグズグズしては居られないという緊張感が走った。学社連携から学社融合へという発想の転換に戸惑いがちであったが、博物館活動がその一端を担っていることは確かである。

12月4日の「グスクを見る」では現在も地域の中に根ざし、村々の御嶽としてまた墓地として大事にされている事を知る。金城・大城・宮城・新城・玉城・山城・城間・安良城や、中城・北中城・豊見城・玉城・与那城など人名・地名に多く使われている。

11日の最終回は「伊是名島の文化」について、尚円王の生誕地の歴史とロマンに満ち島として、丁寧に資料を添えて解説した。これで無事閉講式を終え懇親会にうつった。

4. ボランティア活動状況について

当館の現在の活動状況は多様に及んでいる。解説ボランティア・資料整理ボランティア・点訳ボランティア・音訳（朗読）ボランティア・子供体験補助ボランティア・テープ起こしボランティア・ビデオテープ点検ボランティアがある。日々の活動日誌をまとめると次の一覧表になる。〔表1〕

(1) 展示室解説会（1を参照・表には解説会とす）

年度も改まり新鮮な気持ちで出発し、各学芸員の解説のポイントを学ぶ。72人が熱心にメモを取っていた。

(2) ボランティア養成講座（2を参照・表にはボ講座とす）

6月に各報道機関を通して養成講座の募集をした。定員50人に92人の申し込みがあった。定員でうち切る予定だが、一人受け二人受けているうちにとうとう百人近くにふくらんだ。資料作りが大変だが受け入れることにした。これも現代の社会現象の一つである。延べ人数523人で平均65人が受けたことになる。嬉しい悲鳴である。皆真剣に聞き質問をして、いつも時間オーバーである。8月に入ると少し減った。その原因は夏休みで旅行に出たり、子や孫が遊びに来たりで欠席がちだと言う。次年度は配慮すべきかも知れない。あるいは講堂の空調が駄目で暑かったせいかもしれない。

(3) ボランティア専門講座（3を参照・表にはボ専講とす）

養成講座を終了した者の中から活動希望者を募り登録をしてもらう。25人登録した。(27%) 10月から12月まで10回の講座を組んだ。講師の先生は皆お忙しい方ばかりであったが、そこを前向きに或いは仕方なく引き受けてくれた。ほんとに頭の下がる思いである。館内では体験することの出来ない見学会や実技講習は人気がある。

次年度もこういうプログラムをとの要望がでた。各分野の皆様、講師の出来る皆様宜しくご協力おねがいします。受講者は延べ200人で平均20人である。12月まで欲張って組んだが師走は何となく落ち着かないので入れないで欲しいとの要望があった。

(4) 資料整理ボランティア（表には○印とし人数をあらわす）

毎週水曜日の10時から12時までが活動日である。専用の活動場所はない。館は古いし狭いし、ボランティアの部屋など無い。結局案内コーナーの狭いテーブルを使ったり、図書室に入り込んだりする。そこも来客があったり利用者が居たりで邪魔になる。仕方なく講堂のあいている所にテーブルを出して作業をする。紅型の型紙を番号順に箱に納め、外から何が入っているのか一目瞭然わかるように写真を張り付けるのである。本物の古い型紙を目の当たりにするので緊張の中に感動すると言う。そして一枚一枚丁寧に包装していく。真夏の暑い講堂での作業には頭がさがる。おまけに薄暗いのも難点である。

○資料班 (149人) □子供体験 (44人) 養成講座 523人

△解説ボ (28人) * 巡視班 (35人) 専門講座 200人

表1 ボランティア活動状況

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1		解説会14		○○	□□□ △	○○			**
2				○○	△△△		ボ講座26		○○○○○ ○○
3			○○○○○		***		□	△△	*
4		○	□		***○○			□□□□ □□	ボ講座18 **
5					ボ講座50			通訳 2	
6		○○○○○						ボ講座20	*
7							○○○○○ ○	学習会 5	
8		△		○○○○○ ボ講座76			□		学習会 3
9		□□	○ 学習会 4		***	○○○○○ ○	ボ講座25		○○○○○ ○○○○
10	解説会20	△△△△△ △	○○○○○ ○						**
11		△△	□			学習会 4		○○○○○ ○	ボ講座24
12		△△	学習会 7		○○○○ ボ講座60			○□□	ボランティア会25
13		○○○○○ ○						ボ講座 7	
14	運営委 7	○○	□□□□	通訳	学習会 5		○○○○○ ○○○	□□□□ □□	
15	○△			○○○○ ボ講座85	□□□□				
16				学習会 4	□	○○○			
17	解説会21		○○○○	学習会 8					
18			○	*		学習会 3		○○○○	
19			△ 学習会 4	*	ボ講座60				
20		○○○	□□□					○ ボ講座20	
21		○							
22	○○○○○	ボランテ ア会22		ボ講座71			△△		
23				***			△△△△ ボ講座13		
24	解説会17			*					
25	□□							***	
26		○			ボ講座60			学習会 4	
27		○○○○		**	○○ 運営委		○	ボ講座27	
28	△△△△			学習会 2			○○○○○ ○○○	**	
29				○○○○ ボ講座61	**□	□			
30	△△			衛星通 6		○○○○○	ボ講座22		
31				****					

合計 80 71 44 343 269 24 122 116 66 (1135)

また、昨年行われたスポレク全国大会の膨大な資料も少しづつ片づけられていった。古い新聞や古い校章など思いがけない物が飛び出して来る。そんな所へ若い会員も入り活気に満ちてきた。延べ人数149人になった。

(5) 解説ボランティア (表には△印とし人数をあらわす)

解説ボランティアは春と秋に集中した。これは遠足や修学旅行があるためと社会科の単元の体験学習のためである。その時は2～3校重なって賑やかである。港川人や進貢船・民俗の触れる体験学習は人気がある。そんな時館長も部屋から出てきて満足そうである。ボランティアはもちろん教育普及課も監視の方も大忙しである。この班は今述べたように団体見学がある時活動している。他館では曜日を決めて常駐で解説をしている例もある。神奈川県歴史博物館での「ふろしき展」では時間を決めて解説がなされていた。当館は総合博物館であるため窓口が広すぎるので難しい面もある。延べ人数28人ある。記録もれ或いは記録忘れもあるが多くの協力があつた。

(6) 子供体験ボランティア (表には□印とし人数をあらわす)

いもを植え付けて草取り・収穫・イモ料理と一連の体験学習を全面的に支援した。イモ料理の研究・料理学校での講習会・イモすりの道具作り・料理の試作会・ナムクジ作り・本番と一大イベントであった。また夏休みの古代人を体験しようでも、土器作りの川砂採取や土器成形・野焼き・伊計島の堅穴式住居での一泊と長期にわたるものであつた。これも延べ人数44人あつた。貫頭衣を着ての土器作りはロマンに満ちていた。

(7) 巡視ボランティア (表には*印とし人数をあらわす)

これは7月の「ベリーが持ち帰った植物標本展」で、貴重な標本を大事にしようということで巡視をしてもらつた。狭い企画展示室で肩が触れるほど狭く危険であつた。次は特別展の「ふろしき展」で包み方の実演をした。ついでに露出展示の包み方あれこれを巡視してもらつた。延べ人数35人あつた。

5. ボランティア講座を楽しく (図1～図7参照)

博物館の講座は資料がたくさん出され私が見ても難しそうな資料もある。それを初心者楽しく続けて聞いてもらうためには、どうすれば良いか考えた。手始めにボランティア活動の様子を描いた表紙を付けることにし、次は講座の内容を一目で判断出来る絵図にした。次は発掘作業など動きのあるものに挑戦した。次はやはり沖縄を強調するものと視点を変えていった。そうすることにより次回はどんな講演かどんな内容か楽しみになる。表紙を見ただけで内容がイメージ出来るので後の資料整理するにも楽である。

平成10年度

ボランティア養成講座



沖縄県立博物館

図1

第2回

ボランティア養成講座

「沖縄の染織」



首甲士族通事の服 平成10年7月15日 悦子画

平成10年7月15日 講師 伊波悦子

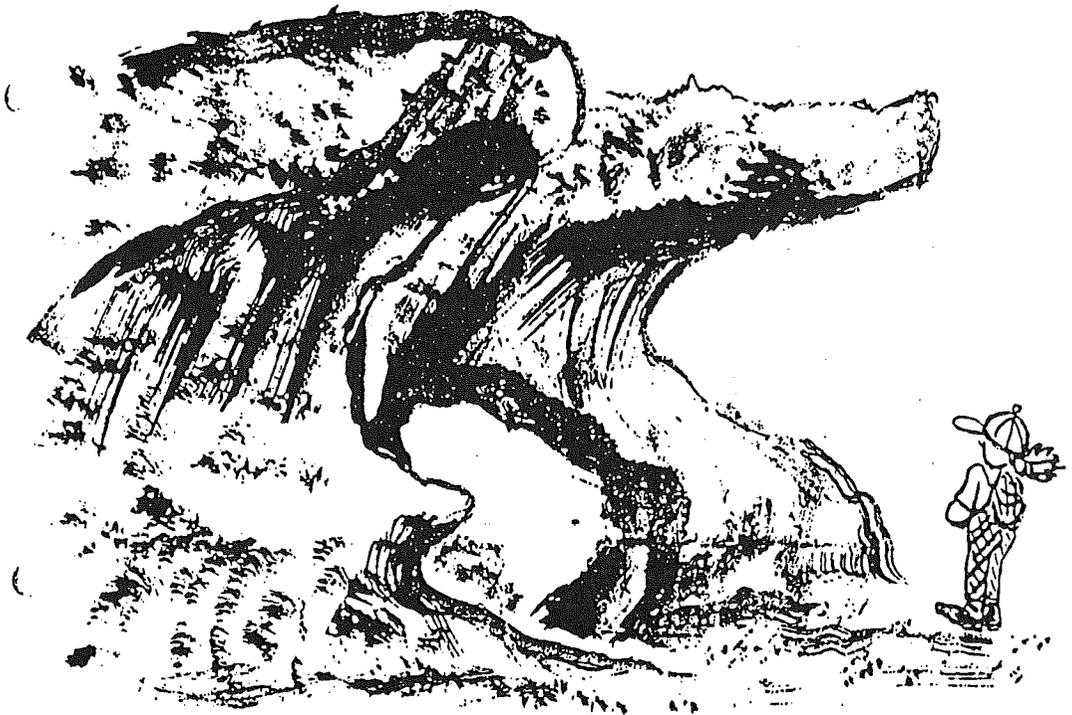
沖縄県立博物館

図2

第3回

ボランティア養成講座

「沖縄の岩石と化石」



平成10年7月22日 講師 神谷 厚昭

沖縄県立博物館

図3

第5回

ボランティア養成講座

「埋蔵文化って何だろう」



平成10年8月5日

講師 大城 慧

沖縄県立博物館

図4

第6回

ボランティア養成講座

「組踊の写本を読む」

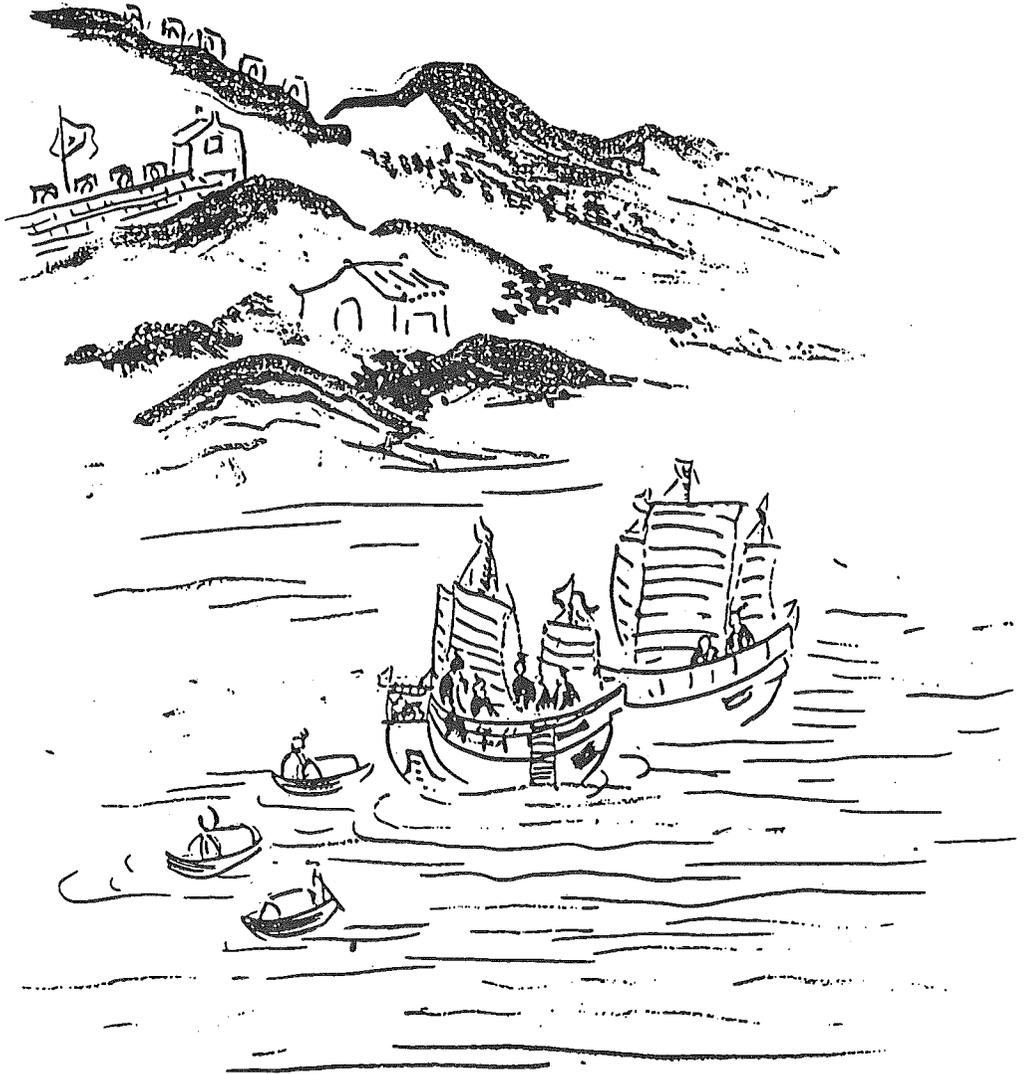


平成10年8月12日 講師 當間 一郎
沖縄県立博物館

図5

第7回 ボランティア養成講座

琉球王国の歴史—大交易時代の琉球を中心に—



平成10年8月19日 講師 萩尾 俊章
沖縄県立博物館

図6

第8回 ボランティア養成講座

博物館ってどんなところ？



ボランティア養成講座閉講式	3 : 4 5	司会 伊波悦子
1 開会のあいさつ	前田真之	普及課長
2 館長あいさつ	當間一郎	館長
3 受講者代表あいさつ	中村啓子	
4 ボランティア会へのお誘い	高江洲和男	ボランティア会会長
5 閉会のあいさつ	伊波悦子	司会

平成10年8月26日 講師 仲底 善章
沖縄県立博物館

図7

6. ボランティアニュース

館とボランティアのコミュニケーションはボランティアニュースでなされ13号がすでに出された。その中からボランティアエッセーをいくつか拾ってみる。

ボランティアエッセー

大 掃 除

12月28日博物館は御用納めの日である。出勤時からジャージ姿の人もあった。これは大掃除の出立ちである。学芸員に大掃除の指令は無かったので普通通りに出勤した。勤務もいつもと変わらず会議が入った。それでも身の周りだけは整理しなくてはと、古い展示物や私物を片づけた。

ロビーをのぞいてみると監視員の皆さんが大掃除の最中である。掃除機で守礼門の模型のゴミを取っている。また首里城の屋根の瓦まで丁寧に拭いておりご苦労様である。正午よりオードブルや飲み物が持ち込まれ、御用納めのセレモニーが始まった。館長のあいさつの後一人一人98年の「思い出・反省」を語り、みな真剣で本音を出している。

年末休みに入り我が家も正月の準備に取りかかった。二百坪程の屋敷は雑草の研究所でもある如く、ススキ・タケ・センダングサ・オオイヌイタビ・ムラサキイラソウなんでもある。それらが伸び放題に伸び足の踏み場も無い。おまけに200~300年の大フクギが屋敷を囲み、モモタマナの枯れ葉は池まで埋め尽くしている。モモタマナやフクギの実実は蝙蝠に食い荒らされ散らかっている。

その様子を見かねて宿六がやっとな腰を上げ、草刈り機のエンジン音も高らかに刈り始めた。雑草はみるみるなぎ倒され、後から息子がかき集めていく。

大晦日、空を見上げると、晴れて風も無いし昨日の草の山を燃やしてしまおうとはりきった。長靴を履き頭はタオルでくるみ準備OK! 枯れ草を集め燃やし始めた。その内青い草や近くの板切れ発砲スチロールなどゴミも放り込んだ。モウモウと黒い煙を上げはじめる。しばらく経って「失礼します。」と制服姿の二人が入って来た。「煙が見えましたので、何をしていますか。年末の警戒に当たっています」と言う。消防署の方のようだ。「草を燃やしています」と正直に答える。「何時から燃やしていますか?」「一時間程前からです」「いつまでやりますか?」「あと一時間ほどです」「では12時頃までですね」「はい。」「この草は誰が刈ったの?」「昨日家族でかりました」「すごいですね、この下は何ですか?」「土です」「この地番は何番地ですか、住宅と同じですか?」「はい」「この建物はなんですか?」「物置です」「あそこは何ですか、人はいるんですか?」「台所です」「水は準備して

ありますか?」「はい、このホースです」と長いホースを引っ張ってきた。「住民からの通報があると困るので一応届け出をして下さい。住所・氏名・電話と印鑑をお願いします。」印鑑を押して「すみませんでした。ご苦労さまでした。」と頭をさげた。すぐ入れ替わりガス屋の従業員二人が飛び込んで来て、「どうしたんですか?消防車が止まっていたので、何かあったのですか?」「??」

夜家族の者が帰ったので先ほどの話をした。皆に嘲笑された。「当たり前だろう、いっぺんに燃やすと始末書くらいは取られるさ。」と涙のでるくらい笑い、笑い納めとなった。

レモングラス

今年も博物館の教育普及課では館長と共に学校訪問をした。5月から7月の沖縄は暑い。私自身これまで学校訪問の経験は無く、校長室を訪れるのには緊張した。校長室は学校の顔の一つで応接室を兼ねてちゃんとしている。新しい学校はクーラーも入り心地よい。

袋いっぱい資料を抱えて行き、一頻り説明をする。そして「博物館を利用して欲しい、必要ならば学芸員を使って下さい。」と館長は声を大にして頭を下げる、いや宣伝をする。このあたりでお茶かコーヒーが出され勧められる。暑い中を来たので丁度良いタイミングでいただく。

ある中学校訪問の折り教頭先生が「手づくりハーブティーです。気分が落ち着きますよ。」と言いレモングラスのティーをだされた。素敵なティーカップに琥珀色の透き通ったティーは美味しそうであった。何と洒落た事をするのかと思いながら飲む。少々疲れぎみの五臓六腑にしみ渡り美味しかった。この教頭先生は実は私の義弟の弟だった。彼は久米三十六姓の末裔で、やはり生まれ育ちが変わっている。その父親も多趣味であり、囲碁もただの囲碁でなく、中国式の囲碁をした。書画はやる、篆刻はする、詩歌は本を上梓するで近ずき難そうな人だった。言わば数奇者といった所だ。

ボランティアの中にもハーブ愛好家がおりに活動日に持参する。休憩時にレモングラスやミントをいれ一服している。丁度良いところに通りかかり加えてもらい、しばらくハーブ談義に花がさく。その日は私もローゼルティーを飲んでいたので、皆さんにも飲んでもらった。ローゼルは数年前ボリビアから取り寄せて栽培しているので、まだ一般的に知られてはいない。ワイン色で酸味が強いがインパクトのあるティーである。

私の庭にもレモングラスの鉢がある。それはやはり愛好家で薬剤師の友人よりもらった。大切に育て時折紅茶を入れその上に浮かべ香りを楽しむ。職場にも持っていき宣伝したりする。夏のある日、いや旧盆の掃除の時高校生の息子が庭の掃除をした。夕方庭に立つと

鉢が無い！ビックリして「どこへやったの？」と聞くと屋敷の隅のゴミ焼き場に「捨てたよ」と言う。見ると無惨にも葉は刈り取られひっくり返って鉢より抜けている。すぐ鉢に戻し水をやる。この際株分けをして増やしておこう、そうすれば一鉢がやられても生き残る事ができる、と大きめの鉢に植えた。息子は「ススキだろう、みっともないよ。」と言う。刈り取られた葉は拾い集めてハーブティーにし、残りは保存しておいた。

喫茶店に入りハーブティーをたのむと、小さな急須にローズマリーとかレモングラスを入れたものが七百円から千円もするのだ。なぜ大事にするかお分かりでしょう。

平成十年も年の瀬を迎えすべてが慌ただしくなった。娘と息子が草刈りをするのを後目に出勤をした。翌朝まだ夜が明けない内に庭に出た。無い！娘に聞くと「砂場の向こうへ場所変えをしたよ」という。そこには生き生きと若葉が茂っている鉢が見えホッとした。

樹木札

現在の博物館は戦前まで中城御殿（または尚家別邸）と称され、琉球王国時代の世子の御殿があった所だ。屋敷は石垣と福木に囲まれ、赤瓦の屋根門（ヤージョウ）構えはさぞ風格のあるものであったろう。現在はその石牆のみが面影を止め、向かいには龍潭や百浦添の薨の波が臨まれる。

1966年この場所に建設された博物館はもう32年も経つ。館が古くて手狭で身動きが取れないのもうなずける。一方植物はどんどん根を広げ回り構わず枝を延ばしている。夜、月を眺めていると蝙蝠がギャーギャー楽しそうに飛び回っている。餌になる榕樹の実やモモタマナの実が沢山あるせいでしょう。11月のボランティア講座・植物観察の中でモモタマナの木下にいっぱい食い荒らされた実が散っているのを見た。

博物館ボランティアの自然史班では、構内にどんな植物があるのか調べた。すると樹木札が無いのに気が付いた。「樹木札を付けましょう」を合い言葉に活動を開始した。活動費は無いので困っていると、職員が廃材があるよと持ち出してすぐペンキを塗ってくれた。次は図鑑より学名を調べマジックペンで書く。吊すのは針金がよいか紐がよいか検討し、テグスが都合良いとわかった。リュウキュウコクタン・ハウオウボク・トックリキワタ・リュウキュウマツ・コバテイシ・ガジュマル・ココヤシ・ピロウ・アダン・フクギ・デイゴ・クチナシ・ゲッキツ・バンジロウ・ヒカンザクラ・さとうきびに至るまでである。まだまだある。それらは複数あるので名札が足りない。また名札のペンキ塗からはじめた。これで来館者もちゃんと名前がわかる。「木が生き生きして館全体が引き締まりました。」と懇親会で発表があった。館長は「誰が付けたのかとこないだから気になっていましたよ、

皆さんがやったのですか。有り難う」と札を述べた。金属製の高い札でなくとも、手作りの暖かみのある樹木札が誇らしく見えた。貴方も館を一回りしてみて下さい。

中国の旅(1)

～中国人気質～

藍花布(らんかふ)または藍印花布(らんいんかふ)の調査のため中国湖南省の旅をした。夜行寝台列車で麻阻という小さな駅に降り立った。2:30である。列車の中で偶然知り合った旅行ガイドの青年二人がこの先案内をしてくれると約束をした。ガタガタのマイクロバスで真夜中の山道を走った。着のみ着のままだったのでだんだん冷えてきた。青年が垢で汚れたブレザーを掛けてくれた。4:30少数民族苗族の農家に案内された。何の連絡もなく突然の侵入者にあわてることなく、奥さんがターバンを巻きながらカヤの中から出て来、ご主人も人民服のボタンを掛けながらでてきた。好々爺と云った恰幅の良い人で、この村の世話役と云った感じである。言葉がわからないので、藍染工場の写真を見せここへ行きたいと指さした。

そのうち朝食に鶏と家鴨を料理してあげるというので嬉しくなった。隣に鶏を買いに行くと言うので50元(750円)をわたした。庭で放し飼いになってるアヒルは35元(525円)だ。奥さんは竈(シンメーナービの大きさ)に湯をわかす。一人息子の中学生らしきは、目をこすりながら水を汲んで来て冬瓜の皮をむいた。そして真っ赤な唐辛子を石臼でつき始めた。

話を聞くうちに、この村では藍花布はもう染めていない。1994年まではやっていた以前はあの原っぱで布を干していたよと、遠くの方を指さした。隣町に行けば工場があると言うので発つことになった。あの羽をむしり取られた鶏は、アヒルはどうなるのと気になった。ガイドの青年はチャッカリビニール袋に押し込んでバスに乗った。我々は哑然とした。そこまでしなくてもいいのに。持ち帰ってもバスの中ではどうしようもないぞー。それより朝食にありつけないのがくやしい。バスはどんどんはしる。鶏には蠅がたかる。

目的の工場を探しあてた。しかしひと月前に閉鎖しましたと言う。途方にくれているとガイドの青年は古い町並みや、丸太橋を案内してくれた。そのうちバスの運転手がおこりだし、賃金をあげろと要求してガイドと喧嘩をはじめた。挙げ句の果て駅で降ろされてしまった。鶏もスーツケースももったまま次の行動を考える。

一台の車を借り七名乗り込んだ。隣町まで2時間かかった。帰りの夜行のキップを買い一安心した。もう3時近い。レストランをさがして席についた。青年は鶏とアヒルを調理

してくれとかけあっている。その真剣さに負けたのか、あるいはこれが常識なのか調理してくれ、スープになってでてきた。鶏は腐っていないか、蠅のばい菌は大丈夫か心配はしたものの、お腹がすいているので食べてしまった。アヒルのスープは残った。これは青年の妻と子のために持ち帰る事にした。

夜行列車の時間まで間があるので町を歩いた。腹いっぱいになった青年はお土産を買いそうな店を案内してくれた。

中国の旅(2)

～上海蟹～

調査隊のうち一人は中国がはじめてであった。にもかかわらずいろんな情報を持っていた。あるエッセーを読んで「上海蟹は世界三大珍味を持ってきても、これ以上のものはないそうだ。」といい、「上海ではぜひ上海蟹を食べようよ。」と決めてしまった。「11月が解禁でとても大きくて美味しいそうよ。」食事の度にこの話題がでた。その晩餐会は上海を発つ前日ときめた。すなわち11月6日の晩である。

11月5日は桂林で半日をすごした。夜行列車を降り、超距離バスに乗り継いでやっと桂林にたどりついた。もう2時もすぎている。朝食抜きの昼食をとりながら「桂林の名物は何か」とウエイトレスに聞いた。「漓江の魚や蟹」だと言う。「では夕食に蟹を予約しよう。大きい物から3キロね。」と通訳の陳女史が念をおした。夕方タクシーで観光地をまわり、土産物をさがしにデパートにいった。微笑堂は日本のニコニコ堂資本なので少し安心して買い物ができそうである。まずシミとりクリームやシワとりクリームを探して買う。お茶・酒・香辛料など買いこむ。

さて、いよいよ夕食の席についた。メインデッシュの蟹が水槽に動いている。見ると小さいのがわずかである。それを見た女史は目の色をかえてウエイトレスを呼びつけて文句を言っている。「大きい物を3キロと言ったのに約束どおりではないじゃないの。どうしてくれるの。」漕女史も大声で「みんな楽しみにしていたのよ。こんな小さいものちっともおいしそうじゃないわ。失礼じゃないの。」と30分近くやり合っている、ウエイトレスもまけてはいなかった。私たちはただ見ているだけであっけにとられた。「そこまで喧嘩しなくても適当に料理したっていいじゃないの。」と思ったが女史達に任せた。やはり沖縄人丸出しの「テーゲー」精神しか持ち合わせていないのだ。それよりはやく食事をしたい。夕方デパートで買った9元の地元産の安いワインを女史にすすめた。女史は「わたしは60元以上のワインしか飲みません。」と凛と答えた。私たちは「あふぁー」になった。

蟹は赤く揚げられて出された。皆気を取り戻し明るく振る舞って箸を取った。

6日は5時起きで「璃江下り」を楽しんだ。私はつい8月に遊覧したばかりであったが、今回は地元用の小舟を借りたので、安く船長と料理人の奥さん以外の人はいない。朝が早いので霧がかかり冷えた。ご来光が山の端よりピカッとでた。ゆったり4時間かけて終点の陽朔についた。

夕方上海へ向かう。上海蟹は漕女史の叔父様がレストランの席を予約して待っている。頭の中は蟹で一杯であった。しかし飛行機はいっこうに飛び立つ気配がない。やっと1時間遅れ飛んだ。「蟹はどうなるのか、大丈夫よね。」と心配はかくせない。11時過ぎに到着した。当然蟹は藻屑と消えた。ホテルに着くと予約してあるのが、チェックインが遅いので部屋がないという。嘘のような話である。

中国の旅(3)

～ホテル騒動～

上海のホテルは一日目に泊まったホテルであり、前金も500元置いて出発したのに「部屋がありません。」と平然と言うところに呆れはてた。例の如く二人の女史は又40分近くも喧嘩越しにやりあっている。しかも漕女史の叔父様も加わって三人とホテルマン二人とである。叔父様はOO電子会社の重役で、二枚目の頭の切れそうな聡明な印象をうけた。その叔父様のコネでこのホテルに宿泊できたのだがこの始末である。謝るところか他のホテルを紹介する気配もない。どうしろと言うのか不思議な民族である。その間我々はソファーに深くもたれかかり、疲れた体を休めた。

そのうちホテルマンはレシーバーで大声で話しながら階上へ上がって行った。三～四人の男達がしぶしぶ玄関を出て行った。きっと部屋を追い出されたのだろう。すぐ「部屋へどうぞ。」と案内された。しかし「一部屋しかありません。」と言う。「他の人はどうなるの?」と心配したが、「自分たちは後でいいからまず皆さんからさきに。」と女史たちは言い「そうして下さい。」と念をおした。

部屋はきちんとされており、先ほどまで人の居た気配はない。「これはどういう事か?」きっとルームメイキングを無線でしていたのだろう。その時間稼ぎをしていたに違いない。このホテルは観光客専用ではなく三流ホテルといったところだ。「まずは寝られるので良かった。」とホット一息。でも残りの三人はどうなったか気になりフロントへ覗きにおりた。N氏は部屋が取れ、女史達は別のホテルへ行ったと言う。

シャワーを浴びると一時をまわっていた。夕食の豪華上海蟹にもありつけず、「くやし

い。」おまけに腹ペコだ。「そうだ、ラーメンを食べましょうよ。」N氏はカップラーメンをまだまだバッグ一杯持っているのだ。部屋を聞いてもらいに行く。椅子に胡座をかいて食べた。バッグにあるおつまみなど機内食の残りも全部出し食べた。やけ食いだ。

そして時折紅型の話になったり、印花布の話になった。「せっかく現地まで行ってるのに、もっといろんな事を問いたださなかったのだろうか？」と反省し始めた。確かに中国美術全集に載っているその場所、その人に会った。「ひと月前に工場は閉鎖しました。」と言われ、印花布の型紙もクルクル巻かれ埃をかぶって棚の上に放置されていた。「型紙を譲って下さいませんか？」と言うと「いや」と首を横にふった。「注文があれば何時でも仕事はしますよ。」「ほら日本からの着物の注文が以前はありました。」と絞り染めの浴衣の反物をみせた。原色の青や黄色の大きな絞り染めであった。生きる為には金になる仕事をしなければならぬのだ。これが現実である。

しかし、上海蟹の事は忘れない。今日がダメなら明日があるさと、また叔父様にはちゃっつかりと約束をしておいた。明日も時間が無いので昼食に間に合わせて調理をさせて持ってくるようお願いした。その事を考えながらベットに入った。

中国の旅(4)

～上海を発つ日～

いよいよ中国滞在もあと半日を残すのみとなった。ギリギリまで調査に駆け回る。上海博物館に行く者、私たち二人は上海 藍花布館へ資料を見に、デパートに土産を買いに行く者と三方へ分かれた。と言っても例の叔父様のお抱え運転手と車を借りて送迎してもらうのである。迎えは11時30分と堅く約束した。

藍印花布館の日本人久保マサさん(70歳余)を訪ねた。印花布の話をしていろいろ聞き、館内の写真も全部撮らせてもらった。そしてマサさんは「市街地に自分の店があるので安くしてあげる、館は高いから買わないで。」と言うので従った。

約束の時間になった。表に出て待っていても迎えは来ない。マサさんは「明日、日本に帰るので、航空券を買いに旅行社へ12時までに取りに行かなくては。」とあせる。「先にタクシーで旅行社に回ってお店に行きます。」と言って店の名刺を私に渡してY子さんと行ってしまった。私は街路樹の下をうろうろ歩いたりしたがだんだん心細くなった。ジロジロ見られている。なるべく目を合わさないようにした。バッグはしっかり腋にかかえなおした。30分も遅れて迎えは来た。「もう時間がないのですぐホテルへいく。」と言う。「ではY子さんを店に迎えなくては」と事情を話すと皆顔がひきつっている。「よけいな行動は

して欲しくない。」と言わぬばかりであった。私は名刺を運転手に見せて「このマサさんの店に寄って下さい」とたのんだ。

だいぶ走って店をみつけた。店員以外誰もいず「店を間違えたかな」と思い、名刺を差し出すと「OK」と頷く。漕女史が駆けつけて聞いてくれ、私に事情を説明した。が彼女は日本語がだめで、私は中国語がだめときた。通訳の陳女史が車から降りてきて「今ここへ向かっています。」と通訳した。みな「もう時間がない」とぶつぶつ言いながら降りてきた。でも待たねばならない。その間私は商品をさっと見て自分に合いそうな物をパッと買った。そこへY子さん達のタクシーがついた。「タイムオーバーですぐ出発よ。」と店ものぞかず出発した。もうホテルで蟹を食べる時間などない。空港での約束の時間も危うくなった。ホテルに着くまで皆無口で、一分でも早く着くよう祈った。ホテルには例の叔父様が調理済みの上海蟹を持って待っていた。残念だが挨拶をしてすぐ発つしかない。「蟹は叔父様と一緒に食べて下さい。」といった。「せっかく楽しみにしているし空港で食べて下さい。」と女史たちは拒んだ。ひとまずビニール袋に詰めて出発した。空港までの間「蟹はどこで食べようか?」「レストランで食べよう」「待合いで食べよう」・・・と。

約束の1時には間に合いホッとした。ここで二人の女史ともお別れである。ロビーはものすごく混んで、大きなスーツケースは預けたものの、手荷物にした上海蟹はプンプンにおいをまき散らし具合わるい。搭乗しても置く場所もなく始末がわるい。どうにか二等分した蟹は帰りのタクシー中でも相変わらず気になる存在であった。

7. さいごに

平成5年7月1日より博物館ボランティア活動が実施されてより満5年を経て、着実な活動をしている。平成6年の第一回登録ボランティアは15名で組織され出発した。平成8年の50周年の時には31名の登録ボランティアがあり、平成10年度は67人にふくれあがった。今年の新会員の特徴は、

第一に若い方が入会したことである。二十歳の大学生もおり授業のない日に活動している。またイギリスの大学を卒業して大学院に入るまで勉強したいと言って英訳に精を出している方。先輩に負けずと班活動に参加する方、積極的にいろんな事にチャレンジする方。古い方と新人と同じテーブルで作業をしている姿は微笑ましく、どちらもお互いに得るものがあると言う。

第二の特徴は退職した男性の入会も目を見張るものがあり、テープ起こしなど地道な活動をしている。

第三の特徴は本格的な点訳ボランティアが入会し、博物館だより・展示室案内・リーフレットなど点訳したことである。視覚障害者の来館の時自信を持ってさしあげられる。ま

た、点字図書館や盲学校へそれらを寄贈をしたことである。

これからの活動として、「ボランティア活動は学習の場である」と全国ボランティア協議会でも提唱されているように、我々も学習に力を入れたい。早速1月には体験学習として紅型の風呂敷製作と焼物に挑戦する計画である。

また、6月には隔年おきの全国ボランティア協会議があるので、当ボランティアも参加していきたいと思う。そして他館のボランティアとの交流を深めたいと思うのである。

最後に新館構想が出て久しいが、図面を広げて見るとボランティアスタッフルームがあるので皆喜んでいる。そこで充分活動出来る日を、また高齢になっても体が動くまで活動できる事を望んでいるのである。

文 献

沖縄県立博物館50年史 1996年